

色の好みとパーソナリティについての研究 その6

— 色彩嗜好と性格特性 —

Study on the relationship between color preference and personality part6
— Color preference and personality traits —

松田 博子	Hiroko Matsuda	カラーコンサルタントスタジオ	Color Consultant Studio
伊坂 裕子	Hiroko Isaka	日本大学	Nihon University
名取 和幸	Kazuyuki Natori	日本色彩研究所	Japan Color Research Institute
仲谷 洋平	Yohei Nakaya	京都造形芸術大学	Kyoto University of Art & Design

キーワード：色彩嗜好, YG 性格検査, パーソナリティ, 大学生, 性格特性

Keywords: color preference, YG personality Inventory, Personality, University student, Personality Traits

1. はじめに

色の好みとパーソナリティの関係を明らかにするために、「環境的要因」「個体的要因」「調査に関する要因」をできるだけ統制した条件で調査を行った。具体的には、気候風土も風俗習慣等の文化的背景もある程度同じと思われる居住地域（大阪・京都周辺）において、年齢（18～23歳）、職業（大学生）、照明（照度 650ルクス以上）、調査時期（6月7日～20日）、調査場所（大阪・京都の大学の講義室）などを同じにし、さらに流行による影響をできるだけ少なくするために5年という経年調査を行った。調査には、色彩属性の色相・明度・彩度・及びトーンにそれぞれ重点を置いた色刺激を用いて、好きな色を選択させた。併せて受検者全員にYG性格テストを実施した。色ごとに好きと回答した選択者と非選択者のYG性格テストでの12尺度別平均値を比較し、色彩の持つ心理的効果の一つである感情的効果としての色彩嗜好とパーソナリティとの関係を4種類の色刺激を用いることにより明らかにした。

2. 方法

2.1. 調査対象者と調査時期

対象者は京都、大阪近郊在住の大学生。年齢18歳～23歳（平均19.5歳）。

- 1) 75色テスト, トーンテスト, 彩度テストの調査対象者: 男性106名, 女性395名, 合計501名, 2001～2004年6月14日～20日に実施した。
- 2) 75色テスト, トーンテスト, 彩度テスト, 明度テストの調査対象者: 男性141名, 女性138名, 合計279名, 2005年6月7日～16日に実施した。

2.2. 性格テスト

矢田部ギルフォード性格テスト（一般用）を用いた（YG性格テストと略す）。

2.3. 色刺激

- ①75色テスト: 明度N7.8のグレイを背景にしたA4サイズの75色のCGプリント（各色の大き

さ1.4×2.3cm）。10色相, 7トーンから成る有彩色70色, 無彩色5色の計75色で, PCCS色彩体系から系統的に配列したものを使用。

- ②トーンテスト: N6の灰色画用紙（40×168cm）を背景にして, 日本色研配色カード175b（17.5×6.0）を使用し, b・v・dp・lt・d・dk・p・ltg・gトーンの偶数の色相番号を12色, 色相番号順に配列して9つの扇形のグラデーションを作成した。
- ③彩度テスト: N6の灰色画用紙（40×55cm）を背景にして日本色研標準カード230（2.9×7.5cm）を使用し, 3つの彩度の違うグループを作成した。用いた色相は4R・4YR・5Y・3GY・3G・3PB・7Pの7色を縦に配列した。各色相からA低彩度（C（クロマ）=1.0～2.0）, B中彩度（C=5.0～6.5）, C高彩度（C=10.0～12.0）に分け, 各色相の明度差は1.5以内, 中明度色（V=4.0～7.5）のみを用いた。
- ④無彩色の明度テスト（2005年のみ）: N6の灰色画用紙（27×76cm）を背景にして日本色研配色カード175bを, A高明度グループ（Gy-9.0～Gy-5.5）, B低明度グループ（Gy-5.0～BK）のそれぞれ8色を明度順に扇形に配列した。

2.4. 手続き, 手順

- (1) 75色テスト（好きな色3色を選択）
- (2) トーンテスト（好きな色グループを選択）
- (3) 彩度テスト（好きな色グループを選択）
- (4) 無彩色の明度テスト（好きな色グループを選択, 2005年のみ）
- (5) YG性格テスト（強制速度法, 集団試行法）

3. 結果と考察

性差の検討も含めて男女別に結果を示す。各テストの色相別, トーン別, 彩度別, 無彩色の明度別に, 好きな色として選択した人と非選択者に分けて, YGテストの各尺度の粗点を従属変数として一元配置分散分析を行い検討した。

3.1 YG性格テスト

男女別に, YG性格テストの12尺度粗点の平均値を求めた結果, 本研究の受検者の得点分布は一般大学生の傾向と同程度であることが確認された。 t 検定により, 調査対象者の2つのグループに差

が見られなかったので、男女ごとに、2群をまとめて検討した。

3.2 男性嗜好色と性格特性

3.2.1 75色テストの結果

好きな色としてpトーンを選択した人は、神経質、協調性があり、社会的内向などの性格特性においての得点が有意に高く、白を好む男性は気分が安定している、客観性があるなどの評価が得られた、またダークグレイや黒を好む男性は攻撃的な傾向が強かった。男性は嗜好率の高い緑系・青系の色相と白・黒、pトーンに性格との関連が多くみられた。

3.2.2 トーンテストの結果

全9トーンのうち3トーンで1つ以上の尺度に有意な差が見られた。bトーンを選択した人は「気分の変化」「客観性欠如」が有意に低く、dpトーンを選択した人は「社会的外向」が有意に低かった。dkトーンを選択した人は「協調性欠如」($p < .01$)、「攻撃性」が有意に高かった。

3.2.3 彩度テストの結果

各彩度で、有意な差は見られなかった。

3.2.4 無彩色の明度テストの結果

高明度を選択した人は、「のんきさ(何か刺激を求める気軽な性格)」が有意に高かった。

3.3 女性嗜好色と性格特性

3.3.1 75色テストの結果

vトーンの暖色系(赤・橙・黄)を好む女性は、外向性が高く、高明度の寒色系(青・青紫)を選択した女性は内向的であった。女性は暖色系・dkやpトーンで性格との関連が多く見られた。

3.3.2 トーンテストの結果

全9トーンのうち、中高明度の6トーンに有意な差が見られた。高彩度トーンであるvトーン選択者は、非選択者より「攻撃性」($p < .01$)、「のんきさ」($p < .01$)、「支配性」($p < .001$)、「社会的外向」($p < .01$)などが有意に高く、bトーン選択者は「一般活動性」が有意に高く、「抑うつ性」が有意に低かった。ltトーンは「支配性」($p < .01$)が有意に低く、「気分の変化」が有意に高かった。dトーンは「一般活動性」($p < .01$)、「のんきさ」、「思考的外向」($p < .01$)が有意に低く、「協調性欠如」が有意に低かった。pやltgトーン選択者は「のんきさ」が有意に低かった。高彩度トーン(b・v)選択者は、外向性が高く、中・低彩度トーン選択者は、外向性が低いといえる。

3.3.3 彩度テストの結果

すべての彩度で有意な差が見られた。高彩度では7尺度に、中彩度では6尺度に有意な差がみられた。高彩度を選択した人は、非選択者より「一般活動性」、「のんきさ」($p < .001$)、「思考的外向」、

「支配性」、「社会的外向」($p < .01$)が有意に高く、中彩度を選択した人は「一般活動性」、「のんきさ」($p < .01$)、「思考的外向」、「支配性」($p < .01$)、「社会的外向」($p < .01$)が有意に低かった。これらの向性因子で高彩度と中彩度は、対照的であった。また高彩度を選択した人は「抑うつ性」($p < .01$)、「神経質」($p < .01$)が有意に低く、中彩度を選択した人は「神経質」($p < .01$)が有意に高かった。これらは情緒安定性因子であり、高彩度を選択した人は、非選択者より情緒安定性が高いことを示している(図1)。

A (低彩度)	B (中彩度)	C (高彩度)
R	\square G. R. T. A. S	\square D. N. G. R. T. A. S

$p < .05$ 太字: $p < .01$

\square : 選択者平均点 > 非選択者平均点 その他: 選択者平均点 < 非選択者平均点

D: 抑うつ性, C: 気分の変化, I: 劣等感, N: 神経質, O: 客観性欠如, Co: 協調性欠如, Ag: 攻撃的, G: 一般活動的, R: のんきさ, T: 思想的外向, A: 支配性, S: 社会的外向.

図1 (女性彩度テスト結果)

各彩度グループへの「好き」選択者にみられる性格特性傾向(女性)

3.3.4 無彩色の明度テストの結果

高明度を選択した人は、非選択者より「劣等感」が有意に高かった。

4. まとめと今後の課題

75色テスト(単色嗜好)では、男性は緑系・青系・白・黒に、女性は暖色系(赤・橙・黄)、dkトーンにパーソナリティとの関連が多く見られ、pトーンの色相は、男女ともパーソナリティが関連することが示唆された。男女とも特定の色(40%)の好みにはパーソナリティが影響している可能性が見いだされた。トーンテストでは、男性は3トーン(約33%)、女性は6トーン(約67%)に、彩度テストでは、男性は0、女性は3彩度(100%)とも有意差が見られた。男性の場合、彩度の嗜好とパーソナリティには関連が見られなかった。今後は色彩嗜好と性格との関係を考える場合、性差との関連を念頭において調査をする必要があると考える。また女性は高彩度色を好きな人は神経質や抑うつ性が低く、外向性が高い傾向、対照的に中彩度色を好きな人は非選択者と比べて神経質であり、外向性が低い傾向が見られた。調査色票や性格測定テストは異なるが、松田他(1995)、名取他(2006)の先行研究で示唆された「高彩度を選択した人は情緒安定性が高く、外向性が強い傾向がある」との共通点も見いだされた。

参考文献

- 松田博子・仲谷洋平(1995). 色の好みとパーソナリティについての研究 日本色彩学会関西支部論文集, pp20-21.
名取和幸・近江源太郎・江森敏夫(2006). 色見本配列による心理テストの試作(1) 日本色彩学会誌, 30, 50-51.